

古谷経衡（著述家）

## 首相夫人は「安倍昭恵」という自我に目覚めた典型的な意識高い系

昭恵夫人とはいったい何者なのか。それを探るべく彼女の著書を読み込んでみると、読めば読むほど昭恵夫人が典型的「意識高い系」であることが判明してくる。私は先月、『意識高い系の研究』（文藝春秋）を上梓した。ここで**「意識高い系」の定義とは、「コンプレックスが故に他者への承認に飢えた卑小な自意識の怪物」としている。そしてその「意識高い系」が掲げるフレーズは、必ず具体的ではなく「笑顔」とか「環境」などという、抽象的で多幸的なものだ。**この定義に、昭恵夫人は見事にあてはまる。



安倍晋三首相について語る安倍昭恵夫人

2015年に海竜社から刊行された安倍昭恵著『「私（わたくし）」を生きる』の中にその端的な答えがある。

「安倍晋三夫人」として世界各国のファーストレディと渡り合う中で、「私には学歴も中身も何もない（昭恵夫人は専門学校卒）」と恥じ入り、遅ればせながら猛烈なコンプレックスを自覚したという。

昭恵夫人の転換はここから始まる。社会人入試で立教大学大学院に入学、その過程で**「ミャンマーの農業支援に夢中になり、「土」に異様な執着**を見せる。昭恵夫人が自ら経営する山口県の有機農産品を使った居酒屋「UZU」の開店計画が持ち上がるのもこの時期である。そこには「土」という共通項があるものの、首尾一貫した理論性は存在しない。ただあるのは「意識高い系」の連中に典型的なように、**「抽象的で多幸的な概念」に酔いしれる自分への陶醉と、そしてその陶醉の姿を他者に喧伝することで得られるお手軽な承認への快感**である。

フェイスブックの馴れ合い社会の中では承認の比重の方が高い。昭恵夫人は同書で記述されるように、「エゴサーチ」を繰り返して一喜一憂する。一日何時間もネットに張り付いていた時期もあったという。それまで他者からの評価に無関心だった昭恵夫人が、自我に目覚めたが故の「承認の確認」を繰り返し始めたのだ。「コンプレックスが故の猛烈な承認欲求」。典型的な「意識高い系」の前衛を安倍昭恵は突き進んでいく。

2012年、劇的な自民党の政権復帰と第二次安倍政権誕生後も、**承認の塊になった昭恵夫人の暴走**はとどまるところを知らない。前述「UZU」の経営は継続し、脱原発運動への傾斜、真珠湾（夫より早い）単独訪問、三陸の防潮堤反対、そして医療大麻解禁を主張したり、異様な「土」への固執…。

2015年7月28日、昭恵夫人は被災地気仙沼で「バーベキューパーティー」を開く。コンセプトは「みんなで海を楽しみながら考える」―。如何にも「意識高い系」の連中が考えだしそうな、**如何にも社会的大義を隠れ蓑に卑小な承認を満たす軽佻浮薄なイベントの主催者が昭恵夫人**であった。

このイベントにおける昭恵夫人の感想。「…環境と景観の重要性を私たちはもっと真剣に考えなくてはならないと本当に思います。ショックではありましたが、やはり私自身の「目」でいまをしっかりと見ることが大切だと実感しました」（前掲書 P.76）。「みんなで海を楽しみながら考える」という、本来の主語が「みんな」だったのが、いつのまにか「私」に置き換わっている。何のことはない、「安倍昭恵が海を楽しみながら考える」という昭恵夫人の自意識に、被災地の人々が付き合わされたのだ。

昭恵夫人の世界にあるのは徹底的に自分であり、その活動の実相は常に抽象的で多幸的であり、具体的ではない。具体的なことを考えたり提言したりする必要はない。「抽象的で多幸的な概念を唱えている自分への承認」こそが目的なのだから、三陸地方をどう復興させていくのかとか、原発に代わるエネルギーの具体案とか、そういったものへの関心は極端に薄い。**他者からの視線と承認に快感を覚えだした昭恵夫人の端的な世界観が、この「三陸バーベキュー」に滲み出している。典型的な「意識高い系」**である。

一連の森友学園問題で、昭恵夫人が名誉校長というお飾りの要職を二言返事で受けてしまった因も、「安倍晋三の夫人」ではなく、**「安倍昭恵」としての自我が芽生えた昭恵夫人による暴走の帰結**である。

「子供たちの教育と日本の未来」などどう抽象的で多幸的な世界観を提示されれば、元々思想もイデオロギーも持たなかった昭恵夫人が幼児に教育勅語を暗唱させることのイデオロギー的な是非を判断することは困難である。

森友学園問題が安倍晋三総理に繋がったのは、このような昭恵夫人の軽佻浮薄な承認欲求からすべてが始まっている。

「自称社会起業家」の若者らに囲まれて三宅と同席した写真をフェイスブックにアップロードしたのは同年7月の事であった。その写真を見てぞっとした。昭恵夫人を中心に、「社会起業」などのたまう「若者」連中と輪になって多幸的な笑みを浮かべ、「みんなちがって、みんないい」と締めくくっている。私がフェイスブックの中で何百、何千回と観てきた「意識高い系」の人々が競うようにしてアップロードする、「自分を被写体の中心に置いた多幸的な飲み会の写真」の教科書のようなショットだった。

実を言うと昭恵夫人には脱原発も三宅洋平にも興味はないのかもしれない。ただ「夫（安倍晋三）とは違う政治思想を持った人々とも、対等に対話できる自分ってすごいでしょう」という、コンプレックスが故の歪んだ自意識の道具の一つ。

人生のほとんどの期間を「承認」と無縁に過ごしてきた人間が、後天的に承認欲求の怪物となった場合、その反動は若年層よりも鬱屈とした時間の積み重ねが長い分、より重篤になりかねない。

純粋な承認欲求の塊であるがゆえに、「昭恵夫人が100万円を籠池氏に渡した（寄付した）」という所謂「籠池証言」は、昭恵夫人が典型的「意識高い系」であることを勘案すると、その信ぴょう性が揺らぐのがわかるであろう。昭恵夫人は不特定多数の世間から承認されたいのであって、籠池個人から承認されても意味がない。「おつきの人を人払いして密室で籠池に100万円を渡す」という行為は、「他者に自慢できぬ」が故に、実は昭恵夫人のような「意識高い系」の人々にとってすれば何の意味のない行為だからである。

「妻は夫の後を三步離れてついていけ」という家長権的押しつけを言うのではない。**自分の承認欲求のために国家権力を笠にするな、と言いたいだけ**である。総理の妻、G8という世界の大国の一角を占める国の首相夫人という立場だけに、まっことタチの悪い「意識高い系」である。